



TITLE:

貨幣の本質とその価値(下) - 高田博士に答ふ -

AUTHOR(S):

中山, 伊知郎

CITATION:

中山, 伊知郎. 貨幣の本質とその価値(下) - 高田博士に答ふ -. 經濟論叢
1938, 46(5): 695-709

ISSUE DATE:

1938-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131097>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟論叢

第四十六卷 第五號

昭和十三年五月一日發行

論叢

貨幣と利子……………文學博士 高田保馬

支那農業の片影……………法學博士 財部靜治

ソロキンの^{社會的}過程形式論の評價……………文學博士 米田庄太郎

貨幣の本質とその價值……………商學士 中山伊知郎

時論

物價騰貴と消費節約……………經濟學博士 谷口吉彥

研究

再保險形態の究極的發展……………經濟學士 佐波宣平

中立貨幣と外國爲替相場……………經濟學士 中谷實

ダンピングの理論……………經濟學士 岡倉伯士

說苑

幕末の上海貿易……………經濟學博士 本庄榮治郎

差額地代と限界生産力說……………經濟學士 上村鎮威

附錄

雜報・外國雜誌論題

(禁轉載)

貨幣の本質とその價值（下）

——高田博士に答ふ——

中山伊知郎

五

貨幣の本質に關する私見の根本的な諸點は略々以上で盡される。從つて私見と高田博士說との相違も亦右の本質觀を延長することによつて自然に明にせられるであらう。唯右の本質觀に關聯して吾々は更に茲で貨幣の價值の問題にふれて一言しなければならぬ。何故なれば一般に貨幣價值論に關聯することなしには貨幣の本質論はその重要なく、私がソルラスに對する右の如き解釋の上に打ち立てたところの貨幣觀も亦意識的に一定の貨幣價值說への方向を採るものだからである。

然らばこの方向は如何なるものであるか。吾々は茲でも亦貨幣價值論一般を詳論する餘裕をもたない故に所論を嚴密にこの必要なる一點に限定して行きたいと思ふ。さうするとこの問題に對して先づ與へられる一般的な答は貨幣價值の問題を何よりも先づ量的且つ動的な問題として把握することであらう。貨幣の本質を交換手段に認める見方からは指圖證券的な貨幣價值觀が生れ又從つて貨値の數量說的な把握が導かれることは即ち屢々指摘せられたところであつて改めて云ふまでもない。吾々は茲に所謂指圖證券說乃至數量說の意義を以て量的且つ動的

な貨幣價值論の性格を指示するものとして確定するに止めておかう。實際交換手段としての貨幣の価値は第一義的には貨幣の購買力に外ならず、この購買力の大小並びにその變動は先づ貨幣と財貨との對立の指圖證券的解釋によつて、從つて又存在する貨幣の數量との關係に於て導き出されねばならないであらう。吾々はこの點に於て貨幣の價值の問題をその量的變動の問題、換言すれば貨幣の購買力の變動の問題として把握する多くの論者に賛同すると共に、むしろ問題をこの方向に推し進めることによつて個別的價格比例の問題から物價水準決定の問題への足場を得たいと考へつゝあるものである。

唯然し乍ら吾々の貨幣觀を以てすれば、貨幣が貨幣として右の如き交換價值を有し得ることの根據は單純にそれが交換手段たるところから由來するものではない。それは唯所謂計算貨幣を實現する限りに於てさうであるにすぎない。そのことは以上で與へられる貨幣の定義の單なる文句解釋によつても一應は明白であらう。即ち計算貨幣を實現することは交換手段をして抑も貨幣たらしめる根據であること以上の如しとすれば、その貨幣の貨幣としての價值も亦計算貨幣の實現と關係を保たねばならないのはむしろ當然とされるのである。しかし吾々の論點は勿論かゝる文句解釋には存しない。論點は直ちにかゝる計算貨幣の實現が只今問題となりつゝある貨幣の價值と如何なる關係に立つかにかゝる。この關係を私は曾て次のやうに述べた²⁵⁾

『吾々が本來の貨幣を以て計算貨幣の一の實現であると考へるならば貨幣は何等かの形に於て價值に關係したものでなければならぬことは云ふまでもない。計算貨幣そのものが更に根本的には價值の比較を本質とすることを考へればこの關係は一層明となるであらう。勿論ここに貨幣が關係を保つところの價值は必ずしも貨幣の材料價值たることを必要としない。材料價值はその最も自然的形態であるけれども、廣義の貨幣の場合の如く貨幣が固有の材料價值を有しない場合には當然他の價值であり得る。』

けれども何れにしても貨幣が一定の價值に關係することはそれが常に計算單位としての貨幣を背景として成立することから生ずる當然の歸結であつて、貨幣の標準のゐるその時々の変更によつて何等の影響をうけるものではない。』

論點を明にするために之に若干の補足をすることを許されたい。先づ茲に云ふところの貨幣の價值は前段に云ふ貨幣の交換價值乃至購買力そのものではない。それは云はゞかゝる購買力をして眞に購買力たらしめるがための價值、換言すれば貨幣をして抑も貨幣たらしめるがための價值である。本文に述べた如くかくの如き價值と貨幣との關係は計算貨幣たる財と交換手段なる財とが同一の財である場合、更に簡単に云へば貨幣自らが素材價值を有する場合に最もよく理解され得るであらう。貨幣の成立を交換の便宜から説明する説明の仕方が多くの有用性をもつてゐる所以である。しかし乍ら貨幣が計算貨幣を實現すると云ふ條件は必ずしもかゝる場合に於てのみ滿されることではない。計算貨幣を實現するところの貨幣は現實に於て最もよく看取し得るやうに屢々それ自ら何等の素材價值を必要としないのみならず、更に溯つて計算貨幣の機能そのものは必ずしもそれ自ら價值ある財を前提として行はれることを必要としないであらう。否現實の貨幣が屢々素材價值をもたずしてよく貨幣たり得ることは、むしろ遡つて計算貨幣の機能そのものが必ずしもそれ自ら價值ある財を前提としないことの結果と解すべきである。この解釋は私の云ふところの計算貨幣の本質を單なる價值の尺度に解する場合には或ひは始から成立しないやうに見えるかも知れない。しかし既に述べた如く私の計算貨幣は決して單なる價值尺度ではない。それはむしろ之によつて間接交換の達し得べき限界を規定するものである。この規定が通常さうであるやうに價值尺度たることと切り離し難いとしても、計算貨幣の本質はかゝる規定そのものにあつて價值尺度たることそれ

自身にはない。若しこの點が充分に強調せられるならば貨幣が一面に於て計算貨幣を實現しつゝ他面に於てその素材価値と分離し得る所以は直ちに明となるであらう。少くとも茲に貨幣と關係を保つところの価値が『必然に材料価値でなければならない』と云ふ岡橋教授の批評が、當らないこととなる筈である。²⁶⁾

私はこゝで岡橋教授の批判に答へることが單に教授に酬ゆる道であるのみならず、進んで私見の意味を更に明瞭ならしめる所以であることを信ずる。しかし乍ら岡橋教授の右の主張は實は單にこの一點に關するものではなくて、反つて私のいま述べつゝある貨幣價值論の全面に關するものである。故に私は教授に對する答に立入るに先立つて、今一步だけ以上の價值論の歸結を述べておかねばならない。さうしてそれは私の貨幣價值論にとつて極めて重要な一步である。即ち吾々は以上の行論の第一段に於て交換手段としての貨幣の量的性質を述べ、第二段に於てはかゝる貨幣をして抑も貨幣たらしめる所以の価値について述べた。第三段としてこれから當然に生ずるところの問題はこれら二つの貨幣の価値が相互に如何なる關係に立つかと云ふことである。これに對しては私は曾て次のやうに述べた。『交換手段としての貨幣は一方に於ては固有の材料価値を必要とせず、他方に於ては一定の価値に關係をもたねばならぬこととなる。このことは貨幣の価値の問題を著しく複雑ならしめる原因である。貨幣の価値を常にその材料たる金屬の価値から説明せんとする所謂金屬主義と、これを全く一の記號又は表章と解するところの所謂名目主義との爭も亦ここに由來するものである』²⁷⁾と。この敘述はこゝでも亦問題の所在を明にするために役立つであらう。否、敢て云ふことを許されるならば、この敘述はその中に既に問題の解決への一つの方向を指示してゐる。即ちそれは貨幣の価値を單にその數量との機械的關係に於て見ることなく、むしろ

29) 岡橋保教授、貨幣本質の諸問題、180頁
27) 純粹經濟學、124—125頁

ろかゝる見方に對する一種の齒止めを常に貨幣をして抑も貨幣たらしめるところの價值に認めようとするものである。吾々は茲でも亦金屬主義と名目主義との相尅の間に具體的な成長を見るところの此の問題に對して詳論の餘裕なきことを遺憾としなければならぬ。しかしこの問題解決の方向に關しては更に若干の言葉を重ねて其の意味を明白ならしめなければならぬ。既に前段に述べた如く交換手段としての貨幣が一定の交換價值乃至購買力をもつと云ふことは、それが交換手段として云はゞ財貨の世界に對立することから生ずる歸結であつて、從つてその限りに於て貨幣素材の固有の價值は必要なる前提條件ではない。普通に貨幣論上の名目主義と呼ばれるものが鋭く指摘するのはこの點であり、貨幣價值の變動原因として主として貨幣數量の側の變動が注目せられるのもこれがためである。吾々は斯くの如き意味に於て貨幣價值論の最も重要な主題が量的變動論の領域にあることを述べた。しかし乍らこのことは未だ吾々が直ちに形式的な數量説を採ることを意味するものではない。所謂貨幣數量説は右の考へ方を形式的に徹底せしめたものとしては充分に意味をもつであらう、けれども、それは唯それだけの意味に於てはあく迄も形式的な表現にすぎないものであつて、貨幣の交換價值の決定を規定すべき内容をもつものではない。實際貨幣數量説がかゝる内容をもつためには増加される貨幣量が如何なる具體的徑路を以て經濟社會の中にとり入れられるかの分析を必要とし、かゝる分析はやがて根本的に増加される貨幣量が如何にして貨幣として作用するかの基礎問題の考察に導かれざるを得ないのである。數量説が唯かゝる道によつてのみ眞に價值ある理論内容に到達し得るであらうと云ふことは舊い認識であつていま改めて強調する必要はないかも知れぬ。しかし吾々が數量説に對するかゝる批評から讀みとり得る一つの歸結については尙充分に之を強調しなければ

ばならぬ。約言すれば數量説を内容づけることが貨幣の貨幣たり得る所以の價值を省ることなくしては達成し難いであらうと云ふことこれである。屢々述べた如く茲に貨幣が貨幣たり得る所以の價值と云ふものは單純に素材價值を指すものではない、それはむしろ端的に貨幣の均衡表現の作用に關聯しての價值である。従つて貨幣數量説の内容づけのためにかゝる價值背景を考慮せねばならぬとすることは尙未だ貨幣の價值の決定に關して名目主義と金屬主義との素朴なる併合を必要とすると云ふ意味ではない。それはむしろ貨幣の均衡表現作用を個々の物價水準の間の關係に追及して行くことによつて數量説を動態的に活用しようとする用意をふくむものである。さうしてかくの如き用意は吾々の見るところを以てすれば、單に上述の理論の論理的歸結として要求されるのみではなく既に多少共數量説の内容に立入らうとした人々によつて實際に試みられてゐるところである。『純粹經濟學要論』の第四版に於て展開されたワルラスの數量説はその一つの例證であらう。ここでは周知の如く貨幣の價值が所謂『所望の現金』(encaisse désirée) の思想を基礎として展開せられてゐるのであるが、それは單なる『流通に役立つ現金』(circulation à dessein) の思想を基礎する舊版の敘述に比して、遙に多く動態論への架橋の積極的意義をもつものであり、その意義の積極性の根本は更に溯つて『所望の現金』の主觀價值的基礎づけに見出されるのである。このワルラスの數量説は數量説としても素より完全ではないであらう、しかし乍らそれが所望の現金と云ふ新なる思想によつて貨幣の價值をも主觀價值論の體系の上に礎き上げようとした企圖には充分の注意が拂はれねばならない。吾々は更にシユムペーターの數量説をも茲に數へ入れることが出来るであらう。不幸にしてシユムペーターに於ては交換手段概念の一方的なる強調のために數量説の敘述に現はれたるその内容的意義は比

較的に注目されてゐない。しかし乍ら三つの命題を以て示された其の數量說の内容は決して貨幣價值と貨幣數量との機械的な關係を示すものではなく、それらは何れもその簡單なる形式の中に含まれたる貨幣の具體的な動きを規定するものに外ならない。積の和を以て示されたこの數量說の表現から同義反覆以外の何ものをも讀みとり得ないとする人々は全くこの點に眼をおぼふものであらう。これらは唯若干の例示に止まる。さうして吾々がこれに依つて示さんとすることは貨幣價值理論に於ける唯一の理論的財産とも云ふべき貨幣數量說に對して眞に價值ある内容を與へるの道は常に之が示す形式を起えて眞に貨幣の動く姿を捕へることであり、之を捕へるがためには貨幣が貨幣たり得るがための價值關係は遂に看過され得ないと云ふことである。

六

私は以上に於て貨幣價值に關する第三段の問題に略答へ得たと思ふ。勿論この第三段の問題には實質上貨幣價值論のあらゆる論點が集まるのであつて、従つて上述は唯吾々の問題に對する方向を指示する以上には出でないであらう。殊に交換手段としての貨幣が結局に於て關係を保たねばならぬところの價值が主觀價值論の上で如何なる地位を與へられるかについては更に詳述を必要とするであらう。又以上に於ては貨幣の價值はすべて本來の交換價值の意味に解せられてゐるのであるが、それは貨幣の貨幣としての主觀的價值に何等の問題なしとするのではない。茲には例へば限界利用說が貨幣の價值に適用し得るか否かの如き問題のあること周知の通りである。私は行論を根本的な一點に限定する必要のためにこれらの重要な問題を割愛した。この省略は或ひは尙以上の敘述の意味を充分に明瞭になし得ないであらう。私は一面に於てこの説明の不足を補足するために茲に喜んで附

橋教授の批判に答へるの機會をもちたいと思ふ。

既に一言したやうに岡橋教授は最近の眞摯なる一連の研究に於て、或ひはシユムペーター説の批評を通じて(貨幣指圖證券學説と貨幣數量説)同氏著『貨幣本質の諸問題』(昭和十一年、第二章)或ひは均衡理論の一般的性質との關聯に於て(同氏論文『貨幣價值論の動態論的性格觀の批判、内外研究昭和十二年七月)或ひは『又貨幣價值の歴史的連續性の構想の性格に就いて』(内外研究、昭和十二年十月)の研究を通じて屢々私見を問題とせられ、特に上述の如き貨幣價值論に對して最も鋭き批評を加へてゐられる。従つて之を對照として私見を再述することは少くとも私見を明瞭にするために得難き機會であると思はれる。而も幸ひにして前段の所論を前提とすれば私が之について述べなければならぬ點は既に極めて僅少で足りる。蓋し前段の所論の中には教授に對する答も亦自らにして含まれてゐるからである。

先づ教授の第一論文に於てシユムペーターの批評を通じて示された私見への批判は次の如く直接に計算貨幣と交換手段としての貨幣との關係するものである、曰く『このやうに、價值の尺度としての貨幣と、交換手段としての貨幣との關係は、中山助教の貨幣生成論では、シユムペーターのそれよりも明確に現はれてゐると言ひ得る。』²⁸⁾『併しながら、この貨幣の生成論における一步前進が、貨幣の價值の問題において、より一層の難點として待ちうけやうとは、中山助教も豫期して居られざるがごとくに思はれる。』²⁹⁾即ち『中山助教に從へば、現實の貨幣たるものはなにらかの意味においてそのものの材料價值に關係してゐる。

(中略)しかも「こゝに貨幣が關係をたもつところの價值は、必ずしも貨幣の材料價值たることを必要としない」とされてゐるが、中山助教はこれを如何にして論證せんとするか!』³⁰⁾ある特定の財貨はそれ自らの材料價值の故に、價值の尺度たる貨幣となることが出來たのである。そうしてそれが、また、交換の手段たるとき、その價值は價值の尺度たる貨幣の價值に、従つてその材料價值に「關係がなければならぬ。しかれども中山助教は「材料價值はそれの最も自然な形態であるけれども、廣義の貨幣の場合の如く、貨幣が固有の材料價值を有しない場合には、當然他の價值であり得る」と述べて、紙幣の如き材料價值なきものはその材料價值に關係があるとは言ひ得ないと主張して居られるものゝごとくである。そうして紙片がなにゆゑ交換手段たり得るかについては一言も觸れて居られない。他の論者の言葉をかりて言へば貨幣たり得るゆゑの價值すなはち貨幣の根源としての價值と貨幣が貨幣として機能するゆゑの價值、職能價值との關係には全然、觸れては居られない。』³¹⁾

即ち氏の主張は要するに私見が貨幣の貨幣としての價值と貨幣が貨幣たり得る所以の價值との關係を無視する

28) 岡橋教授、貨幣本質の諸問題、167頁。

29) 同上、168頁

30) 同上、179頁

31) 同上、181頁

ものであるとし、之を無視するが故に價值尺度の強調に於てシユムペーターからの一步を踏み出し乍ら、結局はシユムペーターの指圖證券學說へ逆戻りしてゐるものであると斷定されるのである。私は私の貨幣價值論の重點がシユムペーターの指圖證券學說に一致するか否かを問はず一に貨幣價值の量的變動の問題、従つて又その數量說的把握にあることを指摘される點に於ては少しも不服はない。けれどもそれ故に二つの貨幣の價值の關係が無視せられてゐるとは抑も何處から得られる論斷であらうか。このことは前節第三段の問題群が私の貨幣觀に於て如何に重要な地位を占めるかを看取せられる讀者に對しては、もはや何等の附言をも必要としない。逆説的に云へば、計算貨幣を實現する限りに於ての交換手段が貨幣であるとする私の貨幣本質觀はむしろ茲に展開される豐富なる問題群を積極的にとり上げんがためのものである。この場合岡橋教授をして右の如き論斷に到達せしめた唯一の理由は、貨幣の關係を保つところの價值を以て必ずしも貨幣の材料價值たることを必要としないと述べた私の一句にあるものゝごとくである。或ひは教授をして云はしむれば若しことが證明せられないならば結局に於て貨幣の二つの價值の關係は解かれてゐないとされるのであらう。しかしこの點については既に前節の第二段に於てふれたところであるから茲には繰返さない。簡単に云へば貨幣が計算貨幣を實現する限りに於て關係すべき價值はむしろ一つの價值關係であつて決して單純なる計算貨幣の素材價值ではないのである。教授はこれについて『ある特定の財貨は、それ自らの材料價值のゆゑに、價值の尺度たる貨幣となることが出來たのである。そうしてそれが、また交換の手段たるときその價值は價值の尺度たる貨幣の價值に、従つてその材料價值に、關係がなければならぬ』と云はれる。しかしこの素朴なる二つの價值の關係の説明は明に吾々の茲に企圖する問題の

要求に答へ得るものではない。それは貨幣が計算貨幣たる資格に於て關係すべき価値の一つの具體の場合に外ならないのである。私見の關する限りに於て岡橋教授が以上を通じて示された主張は消極的には指圖證券學說的な貨幣本質觀に於ては貨幣の貨幣たり得る所以の価値は遂に問題として採りあげることが出来ない」と云ふにあるのであるが、この主張は更に第二の論文に於て一層廣い地盤の上で展開される。簡単に云へば一般均衡論に於ては貨幣価値の基礎づけは不可能であらうと云ふことこれである。この證明は一見一般均衡論が經濟諸量の相互依存關係を基礎とすると云ふ形式的表現によつてそれ自らはれてゐるやうにも見える。³¹⁾しかし乍ら教授自らの認められる如く『質を捨象せる純粹量なるものはあり得ない。従つて一般均衡理論にあつても經濟的數量間の函數關係のみを當面の問題とはすれ、既に經濟的數量の質的規定は與件として前提されて居る。この前提の上に立ちて各經濟數量間の函數關係を問題にして居るものゝごとくである。』³²⁾とすればこの證明は一體どうなるか。その場合には一般均衡論そのものゝ性格ではなくて、むしろその上に立つ人々の貨幣本質觀そのもの、即ち教授が生産的と名づけられるところの名目主義的貨幣本質觀または交換手段學說そのものが貨幣価値の基礎づけの不可能な理由として挙げられねばならぬであらう。さうして教授はこれらの貨幣本質觀が一般に『貨幣は何故に価値を有するや』と云ふ貨幣の価値の基礎づけの問題、従つて貨幣の価値の靜的質的問題を看過あるひは無視して貨幣の価値の問題とは専ら「貨幣の価値の大きさが如何にして決定せらるゝやの事情」の究明のみなりとなし、その動的量的な問題にのみ限定すること³³⁾を以て不生産性とされるのである。私はこの論文を通じて教授が強く貨幣の価値の質的側面を強調される點については反對ではない。それはむしろ私が別の形に於て主張しつゝあるとこ

32) 岡橋氏、貨幣價值論の動態論的性格觀の批判、14-15頁。

33) 岡橋氏、同上、20頁。

34) 〃 319頁。

35) 〃 418頁。

ろである。けれども廣義における名目主義的貨幣本質觀乃至は交換手段説がすべて貨幣價值の基礎づけの問題を抛棄してゐると云ふ主張には賛成し得ない。これは交換手段説と價值尺度説とを餘りに單純なる對立に於て考へる見方から生ずる結論ではないかと思ふ。實際教授は大體に於て價值尺度學説と云ふ本質觀の下に生産費説と數量的見解との綜合を考へられてゐるやうであるが、同じやうな綜合は交換手段説乃至指圖證券説の下に於ても亦認められるところであらう。例へばワルラスの貨幣論がこの問題の展開に對する一つの暗示を與へてゐること吾々の既に指摘したところである。要するに少くともワルラス、シュムペーターを目標として之を語る場合には一般均衡論と貨幣價值論との結びつきは決して不可能ではなく、又それが有する貨幣價值論の量的性格は教授の見るが如く爾く消極的なものではない。³⁷⁾

第三の論文の主たる題目はミーゼスの批判を通じて、貨幣の價值が主觀主義的價值學説を以て基礎づけ得るかを論究することにある。論者のこれに對する答へは以上の二つの論文に於ける主張からして容易に推察し得る如く、否定的である。即ちミーゼスの貨幣價值の連續性と云ふ構想は『貨幣の機能價值(利用價值)原理と、商品價值原理としての限界效用學説とを結びつけたもの』³⁸⁾として大いに高く評價されてゐるのであるが、この構想が右の結合の役割を果してゐるか云ふ點に至つては教授は結局之を否定する。さうしてこの企圖の不成功が『ミーゼスの意圖にも拘はらず、貨幣價值論の動態的性格觀を勃興せしめるの機縁を與へた』³⁹⁾とされるのである。この論文に周到綿密なるミーゼス批判としてそれ自らの考察を要求するものであるが、吾々は論點を集中する必要のためにいまその仔細に立ち入り得ない。しかし乍ら右の結論そのものに對しては既に前段に於て私見と教授の動

36) 18頁註尙貨幣本質の諸問題、177頁。

37) 因に一般均衡論に於て貨幣論が問題となるとき主として Pareto から Dini への問題の移行がとりあげられて Walras の貢獻が無視されてゐるのは不當である。貨幣論については吾々はむしろ Parets よりも Walras を出立點とすべきであらう。

38) 岡橋教授、貨幣價值の歴史的連續性の構想の性格に就いて、239頁。

態論的性格觀との相違を述べた私は殆んど新に補足すべき點を有しない。教授の見方はこの場合に於ても貨幣價值の基礎づけと云ふ問題を單純に素材價值との連絡と見てゐられる様であるけれども、基礎づけの意味するところは素よりかゝる狹義のものではなく、從つて又吾々にとつてはミーズスの如き基礎づけの仕方が主觀主義學說から期待し得る唯一の残されたるものとも考へられないのである。しかしこの點については更に繰返すことを止めよう。吾々はむしろこの全面的なる否定の後に新に建設せらるべき教授の貨幣論の積極的な展開を期待し、さうして其の場合には吾々の間の距離が内容に於て更に短縮されることを希望するものである。

七

貨幣の本質に關する論議は本來貨幣價值論への密接な關係なしには有效でない。その意味に於て私は以上に貨幣價值論の一斑を述べた。述べたところは恐らく充分ではないであらう、けれども少くとも私の抱く貨幣本質觀は之によつて更に明瞭になつたと思ふ。貨幣を以て計算貨幣を實現する限りに於ての交換手段であると云ふ命題の一見しての二元性が以上の説明で一掃されたことは或ひは尙困難であるかも知れぬ、しかし貨幣價值に關する以上の説明は大にこの困難を緩和するであらうと考へられる。實際私はいまも尙この内容を現はすためにより適當なる言葉を見出し得ないのである。私は最後に之をシュムペーター並びに高田博士の所說と對照することによつて今一度其の特質とするところを描き出し、同時にかゝる貨幣學說が貨幣價值論に於て期待する問題展開の方向を指示することによつて結論に代へたいと思ふ。

先づ第一に私の貨幣本質觀は敢て交換手段說を拒否するものではない。唯その交換手段が貨幣たるためにはそ

れは計算貨幣を實現するものでなければならぬと云ふのである。間接交換の必然性は勿論間接交換手段即ち交換手段の必然性を生み出すであらう。しかしこの交換手段が間接交換の限界を規定するものとして一般均衡のシステムの中に登場するためにはそれは必ず計算貨幣を實現するものでなければならぬ。交換手段としての貨幣の必然性と一般性とはかくして一舉に説かれ得るであらう、と云ふのが私見の根本である。私はこの考へ方をワルラスの分析の上に樹立した。しかし既に述べたやうにワルラスの敘述は充分に明確でなく、従つて私の考へ方がワルラスに對する唯一の解釋であるか否かは讀者の判斷に委ねる外はない。現に同じくワルラスから出發したと考へられるシュムペーター教授はワルラスに於てさへ貨幣の本質が把握されてゐないことを繰返して指摘してゐるのである。⁴⁰⁾

しかしそのシュムペーターは私の見る限り、あまりにも交換手段の側面のみを強調してゐる。換言すればワルラスに於ては交換手段と並べ説かれた「通貨」又は計算貨幣の側面が忘れられてゐる。若しこの「通貨」の機能が單純に價值の尺度たることにありとするならば、それは或ひはシュムペーターの云ふが如く⁴¹⁾第二次的の機能にすぎないとされるであらう。しかし乍らこの機能を以て何よりも間接交換の限界を規定する點に求むべしとするならば教授がその貨幣本質の規定に於てこの側面を看過してゐることは重大な缺點と云はねばをらぬ。さうして若し貨幣論に於けるワルラスとシュムペーターとの相違が主としてこの一點にあるならば吾々は貨幣本質の規定に於て充分ならざるものはむしろシュムペーターの説明ではないかと考へざるを得ない。實際吾々を以て云はしむれば、單なる交換手段から一般的交換手段への移行に於けるシュムペーターの説明不足——この點は既に述べた如

40) 3シュムペーター、本質、261頁、267頁。
41) 同上、276頁。

く高田博士によつても亦明白に指摘せられてゐる點である。⁴²⁾ はこの側面の看過から生ずる。即ちシユムペーターにあつては凡そ間接交換の手段たる財は何れも皆貨幣であつてそれが一般的なる一つの財に統一される理由は示され得ない。しかしこれらの財が若し眞に貨幣として一般均衡の成立に参加するものとすればそれらの財の間には必ず更に一定の關係が成立せねばならぬ。さうしてこの思考過程を辿つて行くときに吾々は當然一般的な計算貨幣乃至はワルラスの「通貨」に到達せざるを得ないのである。

高田博士の所説は前段でもふれた如く必ずしもシユムペーターと同一ではない。しかし乍ら交換手段を以て貨幣の本質とし價值尺度を以てむしろ第二次的の性質とする點に於ては兩者全く軌を一にする。相違の最も重要な點はシユムペーターが貨幣の必然性を一般均衡から直ちに導き出さうとするに對し、博士に於ては貨幣を以て一般的交換手段とする限りその企圖は不可能であるとされる點にあるであらう。⁴³⁾ しかしこの相違はシユムペーター説が單なる交換手段から一般的交換手段への説明を始めから拋棄してゐると見るとき結果に於ては殆んど同一に歸するものと考へられる。さうして然る限り私のシユムペーターに對する考へ方はそのまゝ博士の場合にも妥當するものである。附加して一言すれば私は博士が數多の交換手段から一般的交換手段への道を一躍『國家意志又は慣習によるところの選擇』に求められることに賛成し得ない。統一的なる一般交換手段の成立は何よりも理論體系内部の問題であつて、この理論的に成立する一般交換手段が具體的に採るところの形態こそ國家意志又は慣習の問題ではないかと思ふ。従つて若し計算貨幣の導入によつて一般交換手段の理論的説明が可能となるものとすれば敢てこれを拒否する理由はないやうに思はれるのである。

これに關聯して私は一度計算貨幣と價值尺度との用語上のニュアンスに注意を求めたい。私は以上に於て

42) 高田博士、前掲論文、52頁。
43) 高田博士、前掲論文、52—53頁。

は必要のない限りこの兩者を區別せずして用ひて來た。けれども之を實現するところの交換手段をして直ちに一般的交換手段たらしめるところの計算貨幣なるものは嚴密に云へば單なる價值尺度ではない。それは既に繰返して述べた如くむしろ價值尺度たることを通じて行はれる間接交換の限界規定作用に對して與へられたる名稱である。このことは實際之を實現するところの貨幣の特質を明にするのではなく、更に例へば國際經濟に於ける一つの貨幣の妥當範圍を内容的に把握するに役立つであらう。計算貨幣を以て單に價值尺度と解する場合には國際的流通關係にある諸國の互に相異なる貨幣はその間に爲替による換算が可能である限り互に代置し得るものであつて、從つて何れをも貨幣と認め得ると云ふ任意性が生れて來るであらう。しかし計算貨幣を以て單なる價值尺度を超えた一つの機能と考へるときは之を實現するところの貨幣は現實にこの機能の行はれる範圍に於てのみ貨幣として妥當するものであつて、單なる換算によつて無制限にその妥當範圍を擴張するものではないのである。國際流通のある部分については勿論この妥當範圍が重複することがあるであらう。しかしこのことは未だ一つの貨幣が一つの妥當範圍をもつことゝ矛盾するものではない。

私が交換手段の中に計算貨幣の存在を強調する理由は恐らくは既に盡されたであらう。残るところはかゝる貨幣觀が貨幣價值論の展開のために如何なる積極的の役割を果すかと云ふ點である。私がこれを貨幣數量説の新なる展開の上に期待してゐることは既に以上に述べた。繰返して云へば貨幣數量説を從來の單純なる機械論から救ひ出して之を眞に貨幣理論の財産とするためには吾々は退いて貨幣の本質の考察に計算貨幣の重要を強調せざるを得ないのである。然し乍らこの方向を更に縷述することは餘りに吾々の當面の主題を離れることになるであらう茲には單にこの方向を點出して同學諸元の御教示をうける機縁とするに止めたい。